

## 談話室

## 土井邦雄先生に論文指導をいただいて

若林康治<sup>1,2</sup><sup>1</sup> 埼玉県立小児医療センター放射線技術部<sup>2</sup> 群馬県立県民健康科学大学大学院診療放射線学研究科

研究テーマ：TOF 再構成と PSF 補正を用いた PET 画像における腫瘍の位置が SUV 値に及ぼす影響

長い技師人生の中で日本語による学会発表は、自分の専門分野の題材を中心として、何度か発表する機会があるのではないかと思う。私はこれまでに小さな研究会から全国規模の学会なども含めて、数十回と発表を行ってきた。学会発表をひとつひとつ重ねてゆくとやがて、自分の業績として研究を形に残したいと思い始めるようになる。そこで論文に着手してみるが、慣れていない執筆作業は相当な時間と労力を費やしてしまう。何度も見直しやっとの思いで完成させて投稿できた論文も、査読にゆく前の編集委員会からの「論文の体をなしていない」との一文で突き返されてしまう事態は、論文初心者にはよくあることであり、この段階で踏ん張るか、心が折れるかどうか、その人のその後の研究人生終始を決めてしまうのではないかと考えられる。どのように考えても、初学者が誰の指導も得ずオリジナルで作成した論文は、体をなしてなくて至極当然であると思う。

研究の進め方から発表の仕方、そして論文の書き方など、自分自身のみの力では限界を感じていた。特に英語論文を作成することとなると、「大きなハードルだ」と意識してしまい、なかなか書くことができなかった。私のように臨床で技師業務を行っている者は、研究発表や論文執筆に関しては、誰かに指導を受けられるような環境であることは少なく、むしろ研究活動に対しては職場の風当たりなど逆境であることが多い。そのような状況から、私が大学院に入った目的は、臨床ではなかなか得る機会のない、正しい研究の行い方や論文執筆を指導してもらいたいという欲望があったからであった。そして幸運なことに、私は学長である土井邦雄先生に直接論文指導をしていただける機会を得ることができた。

入学後にまとめた研究データは、先生にお会いした時点で既に論文作成に相当な時間を費やしており、有料の英文校閲も終わっている状態であった。先生には研究の背景から内容、結果、結論に至るまでの一語一句から、つじつまの合わない文章構成など全文を詳細

に、時に厳しく納得できるまで指導していただいた。英文よりもまず初めには、日本語で正しく文章を作成することを指導された。英訳前の和文を丁寧に正しい日本語を用いて作成するようにと強く指摘された。作成した自分の和文を注意深く読んでみると、普段はあまり気にすることのないような、主語を省略した不自然かついい加減な日本語を使用していることに気づかされた。主語が抜けた文章では、翻訳しようとしても主語がないので文章を作ることができない。それを無理に訳すことによって、ますます意味の通じない英文となってしまう。そして特に難しいと感じたのは接続詞であった。「with」や「that」は何気なく用いているが、正しい主語が存在することによって反映されて使用可能となる。よく文章中にその主語が抜けている、と何度も指摘されることがあった。Double space で作成すること、数値と単位の間は space を空けることなどの基本、パラグラフの組み立て方やそこで焦点として論ずる重要性、引用文献の用い方、「the」の使用法など、あらゆる細かい部分も逃さずに徹底的に教えていただいた。

これほどじっくりと、充実した論文指導を受けて感じたことは、どんなに立派な研究を行うことができても、結果のまとめ方や文章の構成、適切な語句の使い方など、論文の基本的な執筆方法を指導されていない研究者にとっては、本当に素晴らしい研究を完結することは難しいのではないか、逆にどんな小さな研究でも、きちんと整った論文を作成することができれば、万人が認める立派な研究に仕上がるのではないか、ということであった。

先生に初めてお会いして何度かの直接指導や数十通のメールでのやりとりを通じてほぼ一カ月間半、全面的な修正もありながら自分が納得できる形で論文完成できたことは、私の大学院で学ぶ目的としていたことの達成でもあり、今後の研究や論文作成の自信につながる貴重な経験となった。そして文章、言葉の大切さを改めて認識し、丁寧な和文作成が英論文の一步であることを教えていただいた。今回の土井先生のご指導を今後に生かし、さらなる研究活動を進めて行きたいと考えているところである。